

看護師・その他医療従事者の負担の軽減及び処遇の改善に資する計画（令和6年度実績）

◇勤務時間の把握等（令和6年4月～令和7年1月）※「年休5日取得人数」以外の項目は令和7年1月1日に在籍している職員を対象

職種	月平均時間外勤務			年間時間外 360 時間超え			月平均当直回数			月平均当直実施者数 (延べ)			年休 5 日取得人数 (管理職含む)			夏休平均取得日数		
	R6 年度	R5 年度	増減	R6 年度 (見込)	R5 年度	増減	R6 年度	R5 年度	増減	R6 年度	R5 年度	増減	R6.4～ R7.1	R5.4～ R6.1	増減	R6 年度	R5 年度	増減
看護師	13 時間	9 時間	+4	38/731 人 (5.2%)	19/686 人 (2.8%)	+2.4%	-	-	-	-	-	-	387/7 33 人 (看護助 手含む)	439/68 8 人(看 護助手含 む)	▲11.0%	4.8 日	4.9 日	▲0.1
放射線技師	28 時間	25 時間	+3	17/33 人 (51.5%)	12/32 人 (37.5%)	+14.0%	1.4 回	1.4 回	±0	45 人	39 人	+6	20/33 人	15/32 人	+13.7%	4.9 日	5 日	▲0.1
臨床検査技師	27 時間	30 時間	▲3	18/39 人 (46.2%)	19/36 人 (52.8%)	▲6.6%	1.8 回	1.7 回	+0.1	45 人	48 人	▲3	49/52 人	45/47 人	▲1.5%	4.9 日	4.9 日	0
薬剤師	33 時間	33 時間	0	27/43 人 (62.8%)	23/42 人 (54.8%)	+8.0%	1.2 回	1.3 回	▲0.1	42 人	41 人	+1	39/44 人	41/43 人	▲6.7%	4.8 日	4.9 日	▲0.1
臨床工学技士	20 時間	27 時間	▲7	1/26 人 (3.8%)	8/22 人 (36.4%)	▲32.6%	-	-	-	-	-	-	23/27 人	22/23 人	▲10.5%	4.3 日	4.7 日	▲0.4
リハビリ	15 時間	12 時間	+3	2/34 人 (5.9%)	1/29 人 (3.4%)	+2.5%	-	-	-	-	-	-	32/37 人	26/29 人	▲3.2%	4.9 日	5 日	▲0.1
事務	37 時間	39 時間	▲2	21/40 人 (52.5%)	22/42 人 (52.4%)	+0.1%	-	-	-	-	-	-	40/47 人	47/52 人	▲5.3%	4.7 日	4.7 日	0
※上限	月 45 時間			年間 360 時間			宿直週 1 回/日直月 1 回			—			年間 5 日			年間 5 日		

◇役割分担の推進にかかる取り組み

現状	具体的な計画	令和6年度の達成状況
<p>◆看護補助者の配置</p> <p>○「25 対 1 急性期看護補助体制加算」「夜間 100 対 1 急性期看護補助体制加算」を維持するために、夜間アルバイトの看護学生を積極的に採用し、看護支援システム上で確認している。また、昨年度より取得していた「看護補助体制充実加算」が診療報酬改定により、「看護補助体制充実加算 2」に変更となった。</p>	<p>◆看護補助者の配置</p> <p>○所定研修未参加の看護師及び看護補助者を対象に研修を計画し実施する。また、看護師長には院外研修の受講を促す。</p> <p>○導入した看護補助者のクリニカルラダーに応じて看護補助者の業務範囲を拡大できるようにチェックリストを整備する。同時に「基本的資質」の向上に向けた研修を実施する。</p>	<p>◆看護補助者の配置</p> <p>○所定研修未受講の看護師を対象とした研修は、各部署において計画通りに実施している。また、新任の看護師長 3 名は院外研修を受講した。</p> <p>○看護補助者に所定研修(6～11 月)を計 10 回実施しており、「基本的資質」に係る内容を盛り込み、豊かな人間性を育めるように取り組んだ。また、看護補助者の業務範囲を拡大できるように見直しを行っている。</p>

<p>○看護師との協働を進めるうえで、看護補助者がやりがいを感じながら自己成長に繋げられるようにクリニカルラダーを導入し、「基本的資質」を基盤に教育体制を整備している。</p>	<p>○看護補助者との協働の推進を目指して各部署の取り組み発表を行い、タスクシフト・シェアの実際を共有する。 ○「看護補助体制充実加算1」の取得を目指して、継続して働き続けられる勤務環境の提供に努めていく。</p>	<p>○昨年度よりクリニカルラダー評価を活用し、技術と人間性の両者を備えて自己成長できるような仕組みとして活用している。 ○12部署が看護補助者のやりがい向上・看護師の専門性の発揮と更なる負担軽減を目的に取り組み発表会を実施した。 ○看護補助者の処遇改善に向けR6年2月より看護補助業務従事手当が新設された。中途退職者は1名だが、R7年3月までの退職者は3名で退職率は4.2%。3年以上の勤務経験がある職員の割合は70%を超えている。</p>
<p>◆病棟薬剤師の配置 ○病棟薬剤師を各病棟に配置し、平成28年11月に病棟薬剤業務実施加算を算定開始した。持参薬管理、服薬指導について薬剤師が関与している。 ○通院加療センターで投与するレミケード・インフリキシマブBSについて、薬剤師が無菌的に調製を行っている。 ○毎日交代で、患者支援センターでの対応をしている。 ○患者へ手術前の服薬中薬剤、アレルギー歴確認、術前中止薬の説明を行い周術期の薬学的管理に関与している。 ○令和5年2月より入院患者のTPN（中心静脈栄養）の無菌調製を開始した。</p>	<p>◆病棟薬剤師の配置 ○今後も持参薬管理、服薬指導については、薬剤師が実施していくことで、役割分担を推進していく。 ○引き続き薬剤師によるレミケード・インフリキシマブBSの調製業務を継続する。 ○患者支援センターに専任の薬剤師の配置を検討する。 ○周術期における薬学的管理を推進することにより、役割分担を推進していく。 ○引き続き薬剤師による入院患者のTPN（中心静脈栄養）の無菌調製業務を継続する。</p>	<p>◆病棟薬剤師の配置 ○患者入院時の持参薬の確認、報告を継続している。新規入院患者への服薬指導の実施率は上昇している。今年度は昨年度の74%を上回り80%以上となる見込み。 ○通院加療がんセンターで投与するレミケード・インフリキシマブBSについては無菌的に100%調製を行っている。 ○患者支援センターへの配置は実現できていないが担当を決め薬学的管理等を行い繁忙時は複数名で対応している。 ○R5年2月より中心静脈栄養の無菌的調製を開始し、R6年5月からは、追加して調製当日AM8:30までに入力された中心静脈栄養についても無菌調製を実施している。</p>
<p>◆臨床工学技士の配置 ○今年度より手術室専属技士を10名から15名とし、勤務体制も現状のオンコール体制から夜間勤務体制とした。 ○MEセンターの勤務体制（血液浄化担当技士）においては、現状の休日勤務（土曜日・祝祭日）に加え日曜日も常勤とした（オンコール体制は残る）。</p>	<p>◆臨床工学技士の配置 ○手術室専属技士においては、8月より開設されるHEOR、今年導入された手術支援ロボット「Hugo」等の対応、またIMPELLA、PCPS、ECMO、IABP等を含む緊急症例に対する24時間対応など業務体制の確立が必須。各業務に対する適正配置、人員増が強く望まれる。 ○今年3月より、超音波診断装置、フットポンプの集中管理を開始した。各病棟におけるラウンド件数、院内医療機器の器機管理台数共に増加の一途。人員増を含めた業務体系の確立が必須。</p>	<p>◆臨床工学技士の配置 ○MEセンターに全日勤務帯は、血液浄化担当技士が勤務することにより、休日の集中治療領域での血液浄化や一般病棟の人工呼吸器への迅速な対応が可能となった。 ○手術室、集中治療領域専属技士の夜勤開始により、オンコール（拘束時間）に対する、心身への負担軽減がある程度可能となったが、退職者が2名おり、依然として人員増が望まれる。 ○勤務体制の変更により、大幅に対応できる業務が広がったが、それに比例して人員不足の問題も拡大している。 ○周産期領域の勤務体制の拡大も必須の検討課題となっている。</p>

◇医療従事者の負担軽減に資する取り組み

現状	具体的な計画	令和6年度の達成状況
<p>◆看護職員の勤務環境改善 ○看護補助者との協働を推進しタスクシェア・シフトを進めている。 ○個人の背景を考慮し、適宜面接を行い働き続けられる職場環境を提供している。</p>	<p>◆看護職員の勤務環境改善 ○新人看護師を始めとする看護職員の社会的背景に配慮し離職を防止し定着に努める。 ○認定看護師や特定看護師の活用により患者の重症化を予防し看護の効率化を図る。</p>	<p>◆看護職員の勤務環境改善 ○新人看護師102名、育児休暇後28名・傷病休暇中4名の職員一人一人と丁寧な面接を行い、個々に応じた配置を行った。</p>

<p>○会計年度職員やパート職員へタスクシフトし負担軽減につなげている。 ○生産年齢人口の減少を見越して100人を超える新人看護師を採用した。</p>	<p>○DXの導入による効率化を推進し、業務負担軽減することを検討する。</p>	<p>○特定看護師20名とRRS研修修了者5名から構成される「重症化予防チーム」を形成し、定期的な病棟ラウンドやコンサルテーションに対応している。5月～12月の関与件数は109件であった。また、チームメンバー間や病棟スタッフとの対話により、看護実践能力の向上の一助となっている。 ○DXの導入を見据えて、他の医療機関を訪問・学会への参加・企業からの説明等による情報収集を行い、更にはタイムスタディを行い、何をどのように活用するかを継続的に検討している。</p>
<p>◆短時間正規雇用の職員の活用 ○当院を定年退職する職員に対し、短時間勤務でも雇用しており、専門性を活かして対応している。 (参考) R6年度再任用(短時間)者数 看護師5名 診療放射線技師1名 ※会計年度(パートタイム) 90名</p>	<p>◆短時間正規雇用の職員の活用 ○今後も再任用を希望する職員がいれば雇用を積極的に検討し、豊富な知識と経験を活かせる部署に配置していく。</p>	<p>◆短時間正規雇用の職員の活用 ○令和7年度再任用(短時間)者数 看護師5名 診療放射線技師1名 ○定年延長に伴い、令和5年度より、定年前の60歳以降の職員が一旦退職したうえで短時間勤務に移行する、定年前再任用短時間勤務制度を導入している</p>
<p>◆多様な勤務形態の導入 ○子育て中の職員や、家族の介護を行う職員を対象に、時間短縮・勤務日の削減等の取り組みを行っている。(部分休業、育児短時間勤務、子育て時間、介護休暇、介護時間)</p>	<p>◆多様な勤務形態の導入 ○夏休みの取得率上昇のため、取得可能期間が5月から11月に拡大されたことを引き続き周知。 ○院内インフォメーションを活用し年休取得を推進する。</p>	<p>◆多様な勤務形態の導入 ○子育て時間制度の利用者 R6年度:8名 R5年度:9名 ○介護時間制度の利用者 R6年度:3名 R5年度:3名 ○夏休取得状況平均取得日数 R6年度4.3日 R5年度:4.9日 ○今後も多様な勤務形態提供が可能なことを周知する。</p>
<p>◆院内託児所の充実 ○勤務職員を対象に、院内託児所を設置することで子育て中の職員が業務に専念できる環境を整えている。 ○託児所利用者数はR5年度60名、病児・病後児保育はR5年度 延べ131名が利用した。</p>	<p>◆院内託児所の充実 ○院内インフォメーションや院内説明会で院内保育と病児・病後児保育について周知を行い、職員の利用を引き続き推進していく。 ○託児所職員との連携を図り、更なる利用推進を目指す。</p>	<p>◆院内託児所の充実 ○通常保育201名・一時預かり保育は154名、延べ355名が利用している。(R7.2現在)また、病児・病後児保育は延べ197名が利用した。(R6.4~1) ○更に利用してもらえよう、周知を行っていく。</p>
<p>◆妊娠中・子育て中の夜勤の減免、育児短縮時間の活用 ○減免、短縮時間については、規程を踏まえ、本人の希望も聞いたうえで、勤務の割振や配置換えなどの方法で柔軟、適切に対応している。</p>	<p>◆妊娠中・子育て中の夜勤の減免、育児短時間勤務の活用 ○本人の希望を良く聞き取ったうえで、引き続き柔軟な勤務が可能となるよう推進していく。</p>	<p>◆妊娠中・子育て中の夜勤の減免、育児短時間勤務の活用 ○部分休業制度の利用者 R6年度:39名 R5年度:41名 ○育児短時間勤務者 R6年度5名 R5年度:5名 ○本人の希望等に応じ、勤務調整等を継続している。 ○本人の希望を良く聞き育児休暇中に本人と看護局長、部長と面接を行い希望を聞き取り、柔軟な勤務に対応している。</p>
<p>◆メディカルスタッフの当直の負担軽減 検査部 ○宿直は32名(2名体制)、日直は37名体制(2名体制)で行っている。昨年度に比べ、時短職員の減少や採用があったため、当直に対応できる職員が増え、負担軽減となった。 ○二次救急当番日に勤務する職員に変形労働時間制が導入され、8:30~翌8:45で帰宅できるようになった。</p>	<p>◆メディカルスタッフの当直の負担軽減 検査部 ○今後は、メディカルスタッフの足並みを揃え、全日で夜勤体制にできるように、人員確保を行うなど体制を整えていく。 ○妊娠中の宿直勤務については、減免できるように検討していく。</p>	<p>◆メディカルスタッフの当直の負担軽減 検査部 ○検査部・放射線部・薬剤部のメディカルスタッフ間で意見が一致していない状況ではあるが、今後も交代制勤務にできるように体制を整えていきたい。 ○妊娠中の宿直勤務については、本人の申し出により減免とした。</p>

<p>◆メディカルスタッフの当直の負担軽減 放射線部</p> <ul style="list-style-type: none"> ○27名にて宿日直業務を行っている。2次救急日は2名配置。変形労働時間制を導入。 ○オンコール業務は4グループにて行っているが、アンギオでの呼び出しでの業務が増えている。(アンギオG:7.5回/月、心カテG:6.4回/月、MRG:2.9回/月、応援G:4.8回/月) ○MRI検査において、検査スケジュールが混みあっており、19時ごろに検査開始する事例が増えている。担当職員は早番・遅番等の勤務体制をとっている。 	<p>◆メディカルスタッフの当直の負担軽減 放射線部</p> <ul style="list-style-type: none"> ○IVR、MRI、放射線治療など専門性の高い検査・治療・機器等に対応できる職員の育成を推し進め、救急エリア改修、HEOR運用開始に向けてさらなる増員を検討し、通常業務・オンコール業務の負担軽減・分散を図る。 ○MRI検査担当の人材育成、フレックスタイム制の導入を継続し、土曜日・日曜日の検査受け入れ態勢の構築を行い、運用開始を目指す。 	<p>◆メディカルスタッフの当直の負担軽減 放射線部</p> <ul style="list-style-type: none"> ○すべての部門において人材の育成を行い、各部門、対応できる職員が増えており、全体の負担軽減につながった。 ○宿日直業務を行っている職員は、令和5年度27名から令和6年度29名であり、体制が整いつつある。 ○救急IVRでのオンコール対応が増えており、オンコール業務の見直し検討が必要。 ○救急エリア改修、HEOR運用が始まり、業務量・当直負担の想定が困難な状況である。17:15以降で3~4時間程度、応援職員を配置し対応することも検討していく。
<p>◆交代勤務制導入の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ○R6年度より臨床工学科の手術室勤務の職員について交代制勤務を開始。 ○放射線部・検査部・薬剤部は交代制勤務を導入していない。 	<p>◆交代勤務制導入の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ○放射線部・検査部・薬剤部において交代制勤務の導入を引き続き検討する。 	<p>◆交代勤務制導入の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ○各部署で引き続き基礎的な交代制勤務の導入の検討を進める。